

フランス語を知る、ことばを考える

フランス語圏専攻 石野好一

現代のフランス語はどんな言語だろうか。音や語形、読み方、文構造などを取り上げ、さらにフランス語の論理性について考察することで、フランス語らしさの一端をのぞいて見よう。またそこから言葉の一般的な性質について考えてみたい。

1. フランス語人口

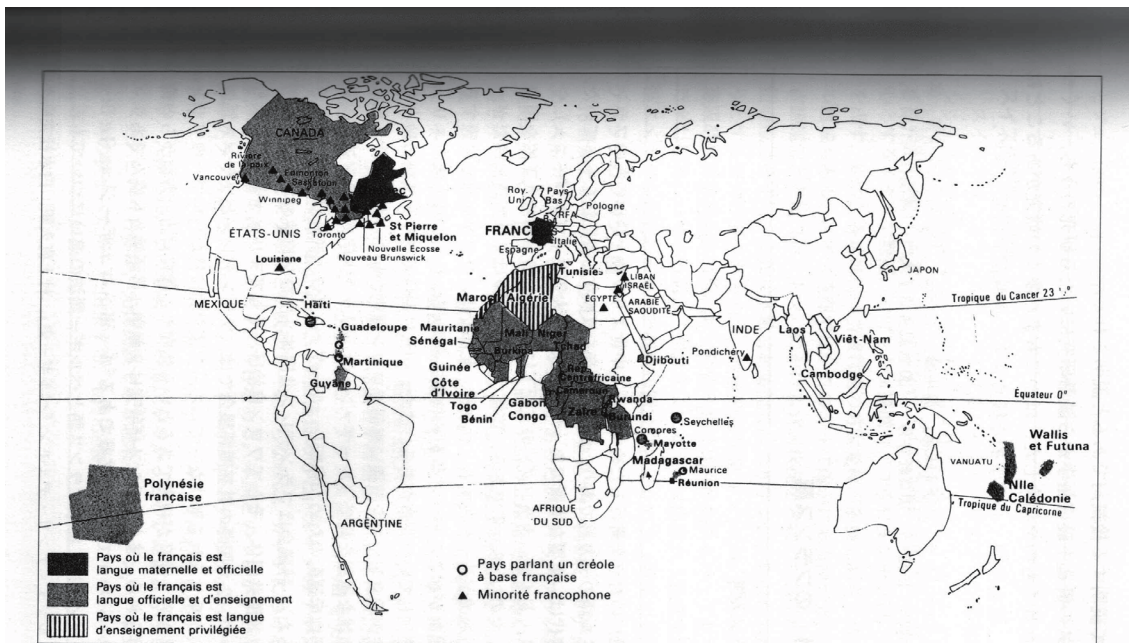
日本語を母語とする人の数は、日本の人口とほぼ同じ1億2千万人である。つまり、日本語話者はほとんど日本国内に限られ、海外にいるのはほんの少数である。

これに対して、フランス国内でフランス語を母語として話している人の数は約5千万人だが、海外の母語話者も含めると7千万人となり、さらに全世界でフランス語を公用語としている人口は2億2千万人となる。(クリスタル, 1992, p.413)

このように、フランス語話者は、国内よりも国外に多いことが分る。

2. フランス語圏 francophonie — フランス語は世界中で話されている

フランス語が話されている地域を見ておこう。



フランス語圏の地図

一都立大仏文研究室編(2003), p.53.

(上図には、フランス語が母語および公用語である国・地域、公用語であり教育言語である国・地域、優先的教育言語である国・地域が示されている。)

フランス語は、世界 42 の国と地域において、公用語となっている。(Breton, 2003, p.73)
具体的に話されているのは次のような国及び地域である。

	Langue officielle nationale (国の公用語)		Langue officielle régionale (地域的な公用語)
	Unique (単一の公用語)	en concurrence (複数公用語の一つ)	
Europe (ヨーロッパ)	France, Monaco	Belgique, Luxembourg, Suisse, îles anglo-normandes (イギリス・アングロノルマン諸島, チャンネル諸島)	Val d'Aoste (イタリア・アオスタ谷 [スイス・モナコ寄り])
Afrique (アフリカ)	Bénin, Burkina Faso, Congo, Côte d'ivoire, Djibouti, Gabon, Guinée, Mali, Niger, République Centrafricaine, Sénégal, Togo, Rép. Dém. Congo	Burundi, Ruanda, Cameroun, Mauritanie, Tchad	
Amérique (南北アメリカ)	Guadeloupe, Martinique (DOM※), Guyane (DOM), Saint-Pierre-et-Miquelon (DOM)	Haïti	Louisiane (合衆国), Québec (カナダ), Nouveau-Brunswick (カナダ)
Océan indien (インド洋)	La Réunion (DOM), Mayotte (TOM※)	Comores, Madagascar, Maurice, Seychelles	
Océanie (オセアニア)	Nouvelle-Calédonie (TOM), Wallis et Futuna (TOM)	Vanuatu, Polynésie française	

— Tomassone (dir.), 2001, p. 145.

※D.O.M = Département d'outremer (海外県)

※T.O.M. = Territoires d'outre-mer (海外領土)

これを見ると、世界のおもな大陸においてフランス語を話す国や地域があるということが分る。

3. フランス語の特徴

フランス語の特徴を知るためには、他の言語と比較してみるのが最も分りやすい。そのために、たとえば「私は君が好きだ」ということを表す次のような表現を題材にしてみよう。

(1) Je t'aime. (フランス語)

(2) Ti amo. (イタリア語)

- (3) Te amo. / Te quiero. (スペイン語)
- (4) Te iubesc. テ・ユベスク (ルーマニア語)
- (5) I love you. (英語)
- (6) Ich liebe dich. (ドイツ語)

一片野(2003)より

4. フランス語の音

4. 1. フランス語の音の印象はラテン語らしくない

同じラテン語から分かれてできた言語(ロマン諸語)なのに、スペイン語やイタリア語に比べると、フランス語は耳で聞いた印象がだいぶ違うと感じる人が多いだろう。

- | | |
|----------------------------------|--------------|
| (1) Je t'aime. (フランス語) | ジュ・テーム |
| (2) Ti amo. (イタリア語) | ティ・アーモ |
| (3) Te amo. / Te quiero. (スペイン語) | テ・アーモ/テ・キューロ |
- 一片野(2003) (発音の片仮名は引用者が追加.)

これはなぜか。(ここでは語源的に同じ動詞を用いている表現のみを比較の対象とし、語源的に異なるスペイン語 « Te quiero. » ははずして考える.)

4. 2. 語尾の音が弱化. 開音節→閉音節に.

次の例も合わせてみていただきたい。

	フランス語	スペイン語	イタリア語
数字の「1」	un アン	uno ウーノ	uno ウーノ
数字の「5」	cinq サンク	cinco スインコ	cinque チンクウェ

挨拶 (フランス語) Bonjour! ボンジュール Bonsoir! ボンスワール
(イタリア語) Buongiorno! ブオンジョルノ Buonasera! ブオナセーラ

上の数字表現は、いずれもフランス語が1音節、スペイン語、イタリア語は2音節である。

また挨拶表現では、フランス語がいずれも2音節なのに対し、イタリア語では3音節ないし4音節になっている。

これは、フランス語ではもともとあった語末の母音が消滅してしまったためである。その結果、他の2言語に比べると短い語が多くなった。この語末音の弱化・消滅が、フランス語の音の印象を他のロマン諸語とはだいぶ違うものにしてしまった。

4. 3. フランス語のアクセントは語末

また、多くのロマン諸語で後ろから2番目の母音(音節)にあるアクセントが、フランス語では

最後になった。

次の「学生」を表す語のアクセントの位置を比べてみてほしい。

- フランス語：étudiant エテュディ**アン** …最後の母音（音節）にアクセント
- スペイン語：estudiante エストゥディ**アン**テ …後ろから2番目の母音（音節）
- イタリア語：studente ストゥ**デン**テ …後ろから2番目の母音（音節）

4. 4. 強弱アクセント

フランス語のアクセントは強弱アクセント(ストレス・アクセント)という性格が強い。他のロマン語が高低アクセント(ピッチ・アクセント)の性格を持つものがほとんどであるのと対照的である。

これはアクセントが語末になったことと無関係ではない。アクセントが後ろから2番目の音節にある他のロマン語では最後は下がることができるが、語末にアクセントのあるフランス語でアクセントの位置を高くすると、最後は常に高くなってしまふ。疑問でもないのに語末や文末を高くするわけにはいかない。というわけで高低ではなく、強弱アクセントになった。

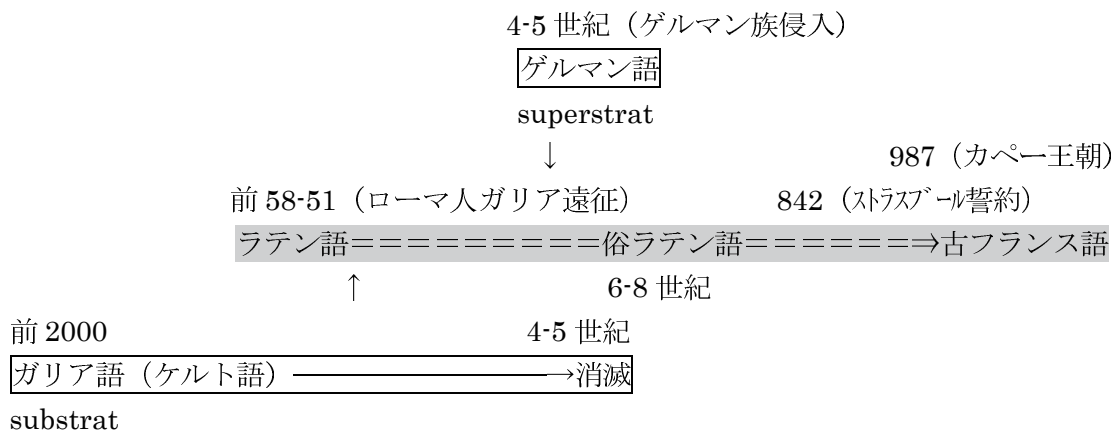
このことは、フランス語の単語内での肯定の変化を少なくし、平板な印象を与えることになった。これがフランス語がロマン諸語の中で独特の印象を与える原因となっている。

4. 5. フランス語の成立と関係あり - ケルト語とゲルマン語

どうしてこのようなことが起こったのか。これはフランス語の成立のしかたと関係がある。すなわち、フランス語は、ガリア地方(現フランス)においてそれ以前に話されていたケルト人の言語(ケルト語、ガリア語)と、後に入ってきたゲルマン民族の言語の影響を受けて、ラテン語が大きく変化してできた一種の混合言語(クレオール)だからだ。

次の図はフランス語の成立をまとめたものである。

フランス語の成立 (石野 2007)



言い換えれば、ケルト語(ガリア語)を基層とし、ゲルマン語を上層とするラテン語が、フランス語である。

フランス語の基層・上層 (石野 2007)

ゲルマン語	…上層 (表層) superstrat
ラテン語	
ガリア [ケルト] 語	…基層 substrat

語末の音が弱くなるのはケルト語の影響があったことが指摘されている。また子音終わり(閉音節)が多いゲルマン語も、その傾向に拍車をかけた。

ところが、イタリア語やスペイン語は、ケルト語やゲルマン語の影響をさほど大きく受けることはなかった。そのため、フランス語の音の印象は、比較的ラテン語らしい発音を残すイタリア語やスペイン語とは異にすることとなった。

4. 6. 音をつないでラテン語らしくする

では、フランス語の音はラテン語らしくないのだろうか。この点で興味深いのは、アンシェヌマン、エリズイオン、リエゾンという読み方の癖である。

アンシェヌマンは、例えば« Elle a ... »(彼女は…を持っている)という場合に、一語ずつ切って[×エル・ア]と読まず、[エラ]と続ける読み方である。

Elle a ... (彼女は…を持っている)
[×エル・ア] → [エラ]

エリズイオンは、« Je t'aime. »(私は君[あなた]が好き)を[×ジュ・トゥ・エーム]ではなく[ジュテーム]と読み、表記上も«*te aime»ではなく«t'aime»とつけてしまう。

Je t'aime. (私は君 [あなた] が好き)
[×ジュ・トゥ・エーム] → [ジュテーム]
«*Je te aime» → «Je t'aime»

同様に、« *le ami »ではなく« l'ami »となる。

リエゾンは、« Ils ont aimé ... »(彼らは…が気に入った)を一語ずつばらばらに読むと[×イル・オン・エム]と各語末の子音は読まないはずなのに、それを読み加えて[イルゾンテム]とする。

Ils ont aimé ... (彼らは…が気に入った)
 [×イル・オン・エメ] → [イルゾンテメ]

前 2 者は英語にも同様の現象が見られるが、リエゾン世界的にも珍しい現象といえるかもしれない。

実は、これらの癖はいずれも同じ原理に基づいている。できるかぎり「子音＋母音」というパターンを作り、母音終わり(開音節)にしようということだ。これがフランス語のもっとも落ち着く発音パターンであり、ここにフランス語のラテン語らしさが顔を見せている。

また、これらの現象は母音衝突を避けるという役割も果たしている。こうすると母音と母音の間に生じる音の途切れが回避できる。その結果、滑らかな発音ができるようになるのである。

ちなみに、リエゾンのように、単語レベルでは発音されない音が、語連続や語構成の中で出現するという現象は日本語にも存在する。例えば、「春(haru)」＋「雨(ame)」→「春雨(harusame)」となって、本来はなかった-s-という音が登場する。これも上と同様の原理によるものと考えられる。ただし、読まない文字が読まれるようになるというのは、語末の子音字を読まなくなったフランス語独特の現象といえよう。

ただし、アンシェヌマン、エリズィオン、リエゾンは、どこでも常に行うというわけではない。原則として「主語＋動詞」「目的語＋動詞」「前置詞＋冠詞＋名詞」などのような意味的なまとまりの中で行う。このようにフランス語では、アクセント(次節参照)、イントネーションなども含めて、音のさまざまな面が、語のまとまり(意味のまとまり)を明確にし、文の構造ををつかみやすくしようとしている。これはフランス語の特徴と言えよう。

4. 7. 移動性アクセント

上 (§.4.3.) で、フランス語のアクセントは語末にあることを指摘した。ただしこれは単語レベルでの話であり、いくつかの語からなる語連鎖(句)ではこうはならない。語を並べて意味のまとまった語句を作るとき、アクセントはそのグループの最後の語(の最終音節)だけに置かれ、それ以前の語のアクセントはなくなってしまふ。すなわち、次の例で太字部分がアクセント位置となる。

un étudiant **super** ア・ネテュディアン・スユペール 「(ある)すばらしい学生」

この場合、名詞 *étudiant* にはアクセントはない。

これによって、フランス語の発音は、全般的にますます平板な印象を持つようになった。その結果、高低アクセントが優勢で旋律の起伏豊かな他のロマン語に比べ、フランス語の印象が著しく異なるものになった。

一般にアクセントは語の境界を示すと言われる。しかしフランス語では、このように、語の境界というよりも、語句のまとまりの境界を示す。これもフランス語の特徴と言えよう。と同時に、これは意味のまとまり、文の構造を明確にするという利点がある。

5. フランス語の形態

上で見たように、語末の音が弱くなるという現象が、フランス語の形態にも影響を与えることになった。

5. 1. 名詞複数形・女性形の弱化・消滅

語末音の消滅は、名詞・形容詞の単数形・複数形の音の区別をなくした。

il – ils	(彼 – 彼ら)	イル – イル
livre – livres	(本)	リーヴル – リーヴル
bon – bons	(よい)	ボン – ボン

現代フランス語では、上のいずれも複数形の-s は発音しない。発音の違いがある語はほんの一部である。

animal – animaux	(動物)	アニマル – アニモ
général – généraux	(一般的な)	ジェネラル – ジェネロ

女性形語尾-e も発音しないのがふつうで、次の例のように、全体の音が変わらないものが多い。

ami – amie	(友)	アミ – アミ
général – générale	(一般的な)	ジェネラル – ジェネラル

語末の発音が変わるのは一部である。

étudiant – étudiante	(学生)	エテュディアン – エテュディアント
grand – grande	(大きい)	グラン – グランド

5. 2. 動詞活用の単純化

次の表はフランス語の動詞 parler(話す)とイタリア語 parlare(同)の現在形の活用を比較したものである。

フランス語		イタリア語	
parler		parlare	
je parle	パルル	parlo	パルロ
tu parles	パルル	parli	パルリ
il parle	パルル	parla	パルラ
nous parlons	パルロン	parliamo	パルリアーモ
vous parlez	パルレ	parlate	パルラーテ

ils parlent パルレル 彼らは話す parlano パルラノ

イタリア語の動詞活用では6通りの音になるのに対し、フランス語では3種類の音しかない。このように、フランス語では語末の音が弱まり、消滅したことによって、動詞活用形の音の種類が少なくなった。一方、イタリア語では、語末音が維持され、活用形も6通りに区別されている。

6. 統語・構文

語句や文の構成に際してのフランス語の特徴を以下にいくつか指摘する。

6. 1. 冠詞の発達

名詞語尾にあった性・数などの情報が、語末音の消滅によりなくなったため、その情報を示すために名詞の前に冠詞をつけるようになった。

un livre – des livres (本 : 単数 – 複数) アン・リーヴル – デ・リーヴル
un ami – une amie (友 : 男性 – 女性) ア・ナミ – ユ・ナミ

冠詞はラテン語にはなかったものである。

6. 2. 主語が必須

動詞の活用語尾の音が弱まり、主語がないと誰の行為かわからなくなったため、常に主語をつけるようになった。

Je parle. (私は話す。)

*Parle.

《*》は「言えない文」であることを示す。(ただし、tu の命令形《 Parle. 》は別のもの。)

ラテン語やそこから派生した同系統のスペイン語やイタリア語では、活用を見れば主語が分かるので、ふつう主語はつけない。つけると主語の強調になってしまう。それに対して、フランス語では、主語があるのが普通で、それだけでは強調の意味にはならない。

6. 3. 代名詞は動詞の前

フランス語は、基本的に英語と同じ SVO 言語(「主語 – 動詞 – 目的語」という語順を基本とする言語)だが、その語順には同じヨーロッパの言語である英語から見て奇異な現象がある。たとえば、動詞の目的語は代名詞になると動詞の前に移動する。この現象はロマン諸語の多くに見られる。

(1) **Je t'aime.** (フランス語)

(2) **Ti amo.** (イタリア語)

(3) **Te amo. / Te quiero.** (スペイン語)

(4) **Te iubesc.** テ・ユベスク (ルーマニア語) 一片野(2003) (既出)

他方、英語やドイツ語ではこれは生じない。

(5) I love **you.** (英語)

(6) Ich liebe **dich.** (ドイツ語) 一片野(2003) (既出)

6. 4. 語順は伝達情報と関係が深い — 左方に旧情報 右方に新情報

これらの現象は、実は文の中で何を最も伝えたいかという情報の問題と関係が深い。つまり言語は一般に、文の中で最も伝えたい部分、言いかえれば新しい情報をできるだけ後に置こうとする傾向がある。フランス語の目的語代名詞を動詞の前に出すという規則にも同じ原理が働いている。

(7) Je donne **un bouquet à Marie.** (私はブーケをマリにあげる.)

私は あげる ブーケを マリに

(8) Je **le lui** donne. (私はそれを彼女にあげる.)

(8') *Je donne **le lui.**

目的語代名詞 **le** は直接目的語 **un bouquet** (花束) を、**lui** は間接目的語 **à Marie** (マリ) にそれぞれ代名詞にしたものだが、(8)のように、いずれも動詞 **donner** (あげる) の前に置く。(8')のように動詞の後ろにおくことはできない。

ふつう、代名詞にする名詞はすでに言われたもの、もう(聞き手が)知っていることである。したがってその文の中ではあまり重要性のない古い情報である。これを文の前方に持って行くと、その結果、後方に残るものが、より情報価値の高いもの(新しい情報)となる。

このようにして、旧情報を左方に、新情報を右方にという構造が出来上がる。

すなわち、(7)と(8)では情報という観点からは価値が異なる。(7)は、たとえば「あなたは何を誰にあげるのか」という質問に対する答えであると考えられる。それに対して(8)は、たとえば「あなたはそれを彼女にどうするのか」という質問に対して、「(売ったりするのではなく)あげるのだ」と言っていることになる。

上に、英語では代名詞の前置はしないと書いたが、英語にも同様の発想があることは次のような例を見ると分る。

(9) John gave **Yoko a flower.** (ジョンはヨーコに花をあげる.)

(10) *John gave **Yoko IT.**

(11) *John gave **HER IT.**

— 金谷武洋(2003), p.40

「(9)の a flower を代名詞に変えた(10)や、Yoko と a flower の双方を代名詞に変えた(11)は間違いである。英語の代名詞は自由に名詞と交換できないのだ。」(金谷武洋 2003, p.40)

(原文では例文(9)(10)(11)はそれぞれ(5)(6)(7)となっている.)
ところが, 次の(12)なら OK となる. (久野他 2005)

(12) John gave it to Mary.

このように, 英語において, 2 つの目的語を動詞の後に並べるとき, 《実名詞-代名詞》(10)の語順や, 《代名詞-代名詞》だけ(11)で置くのは難しい. それに対して, 《代名詞-実名詞》(12)なら問題はなくなる. これは情報価値のないものを文末に並べることの不都合さを示す例と見ることができよう.

6. 5. 代名詞列挙に語順の規則がある

フランス語では, 前に置いた代名詞が 2 つ以上になるとき, その語順に制約がある.

(8) Je **le lui** donne. (既出)

(8'') *Je **lui le** donne.

すでに見た文(8)のように **le lui** (それを彼・彼女に) という語順は許されるが, これを逆にした(8'') **lui le** (彼・彼女にそれを) という語順は認められない.

一般に目的語代名詞は次のような順序で並べないといけない.

代名詞の語順

1・2 人称代名詞 — 3 人称 (直接目的語—間接目的語) 代名詞 — 中性 (副詞的) 代名詞

これはある原理に基づいている. すなわち, 話し手にとって親近感のあるものから疎遠なものへという順序であり, 同時に, よく知る, 情報価値の少ないものから, よく知らない情報価値の多いものへという順序になっている.

もちろん代名詞は, すでに述べたように, すべて古い情報なのだが, その中でも情報の面から順序づけが行われているのである. 上の語順の制約はそれを反映している.

6. 6. 情報構造に敏感 — 非人称構文, 受動態構文

このようにフランス語では, 伝達する情報の古いものを文の前方に, 新しいものを文の後方に置こうとする傾向が他の言語に比べて強い. これはフランス語ではアクセントが語ではなく語句の一番最後の部分に来るということともうまく呼応している (§.4.7.). (またフランス語では形容詞を名詞の後に置くのがふつうということとも関係があると思われるが, ここでは取り上げない.)

フランス語でよく使われる**非人称構文**も情報構造と関係が深い.

- (13) **Il reste** une personne. (残っているのは1人だ。)[il は非人称主語]
 (14) **Il me manque** deux cents euros. (私には 200 ユーロが足りない。)[同上]

これは、本来主語になるべきものが情報として新しいときに、それを後に持っていこうとする工夫の一つだ。

上の例(13)(14)はいずれも自動詞表現で、それぞれ次のように言うこともできる。

- (13') Une personne reste. (1人が残っている。)
 (14') Deux cents euros me manquent. (200 ユーロが私には足りない。)

しかし、そうすると新しい情報が文の前に来るので、文章の流れによってはしっくりいかない。新情報を後に置く方が落ち着くのは日本語の訳をみてもある程度感じられよう。

受動態構文もその意味で同じ役割を荷っているといえよう。つまり既に出ているものをそのまま主語にしたいということと同時に、新しく登場する動作主を文の後の方に置こうとする構文である。

- (15) Mon gâteau **a été mangé par** Pierre. (僕のお菓子はピエールに食べられた。)

ただし、フランス語では英語ほど受身構文は使わない。(次節参照)

6. 7. SVO 構文(他動詞構文)、能動態構文を好み、受動態を嫌う

フランス語は、《主語＋動詞＋目的語》という他動詞構文を基礎とする表現を好む。ものごとをできる限り働きかけ(主体的行為)の形で表そうとする傾向がある。

- (16) **J'ai** faim. (お腹がすいた) cf. (英語) I **am** hungry.
 (17) **J'ai** vingt ans. (二十歳である) cf. (英語) I **am** 20 years old.

(16)(17)のように、英語では be 動詞「～である」によって表すことがらも、フランス語では avoir (英語の have に近い)「持っている」で表すものが多い。

また、天候表現に**非人称表現**が多いのは英語も同じだが、英語が be 動詞を用いるの対し、フランス語は faire (英語の make, do に近い)「作る・する」で表すことが多くなる。

- (18) **Il fait** beau temps. (いい天気だ。)
 (19) **Il fait** du vent. (風がある。)

(18)(19)では、直訳するとそれぞれ「(誰かが?)よい天気を作っている」「風を作っている」となるような他動詞表現になっている。

内容によっては、《 Il fait... 》の代わりに《 Il y a... 》(がある)という存在表現を用いて、次

のように言うこともできる。

(20) Il y a du vent. (風がある.)

しかしこの存在表現《il y a ...》(…がある)自体が、「(誰かが)そこに...を持っている」という言い方からできており、ここにもフランス語がいかにかに他動詞表現を好むかがよく現れている。

フランス語が**受動態構文**を好まないのも同様の理由による。受身は、他動詞表現がもつ主体的な働きかけの表現とは逆になるからだ。

代名動詞という再帰構文がフランス語で発達しているのも同様に考えることができる。

(21) Je **me lève** (à six heures). (私は(6時に)起きる.) [直訳:私は私を起こす]

代名動詞は、英語の再帰動詞表現(enjoy oneself など)によく似ている。日本語で「何(誰)がどうする」という自動詞構文で表すことがらでも、再帰表現は、主語自身を目的語として自分自身に行為を及ぼすという他動詞構文で表す。フランス語ではこれが多用され、英語にはない用法も見られる。

(22) Ce roman **se vend** bien. (この小説はよく売れている.) [直訳:この小説が自分をよく売る]

このように、主体性のないものを主語にして代名動詞をつくることが可能で、この場合、「売られている」という受動的な解釈になる。この用法は英語には見られない。

6. 8. 否定 ne...pas の特殊性

フランス語の否定は、《**ne** 動詞 **pas**》という形で、動詞を ne と pas ではさんで行う。

(23) Je **ne t'aime pas**. あなた(君)は好きではない。

世界の言語の中で、(普通の)否定を2つの語を用いて行う言語は珍しいという。(角田 1991, 金田一 1966)

ラテン語 non は、イタリア語 non やスペイン語 no ではほぼ同じ音が維持されているが、フランス語では ne となって母音が弱くなり、聞き取りにくくなった。そのため、動詞の後に pas をつけてそれを補うようになった。

pas は、当初、「一歩 pas も」(行かない, 歩けない, など)という強めの表現として付加されたものである。同様に、point(一点)なども用いられたが、音の明快さ, 単純さなどから pas が残った。

現代語では、ne は消え、pas だけで否定が行われることも多くなった。

(24) Je t'aime **pas**.

現代フランス語では、このpasが否定の中心的な機能を担うようになり、(23)(24)のように、pasの後に何も無い場合は動詞が否定の対象になるが、pasの後に何らかの要素がある場合、pasの後の要素が否定の対象になることが多い。

(25) Je ne t'aime **pas beaucoup**. あなたのことはあまり好きではない。

この例では、pasの後のbeaucoup(たくさん)が否定され、「(好きだが)たくさんではない→あまり(好き)ではない」という意味になっている。

次のように、pasが否定の焦点を明確にする役割を積極的に担うこともできるようになった。

(26) Je ne t'aime **absolument pas**. (**全部否定**) 絶対に好きではない。

(27) Je ne t'aime **pas absolument**. (**部分否定**) 絶対に好きというわけではない。

(26)では、pasの後には何も無いため、動詞だけが否定され、absolument(絶対に)は「好きではない」全体を強調する全部否定になっている。それに対し、(27)では、pasの後にあるabsolumentが否定の対象となり、「(好きなのは)絶対にというわけではない」と部分否定の意味になる。

7. 談話レベル — フランス語は論理的か明晰か

「明晰ならざるものはフランス語にあらず」(リヴァロル) という有名なフレーズがあるためか、日本だけでなく欧米でも、フランス語は明晰で論理的な言語だということがよく言われ、実際そう思っている人が多いらしい。(バウアー他 2003)

しかし、ある言語が論理的だとか、非論理的だとかいうことは一概に言えるものではない。

例えばフランス語の名詞や形容詞には、単数・複数や男性・女性の区別がある。だからといって厳密だということはない。複数は単数ではないというだけで、具体的な数がいくつなのかは分からない。

フランス語には冠詞が3種類あって、あれこれと名詞の性格づけをしている。だからといって明晰だとは限らない。部分冠詞というめずらしい冠詞は、漠然と量がある(数的ではなく量的に捉えている)ことを表す冠詞で、その量(多量か少量か)は明確ではない。

また、フランス語の動詞の時制は細かく分かれていて、現在形・過去形・未来形の体系がきちんと整っている。(日本語や英語には未来専門の形式がない。「～するだろう(推量)」とか「～するつもりだ(意志)」(英語ならwill)という別の意味の助動詞を流用している。)

しかし、だからといって、それだけでフランス語が明晰な言語だとは言えない。現在形が過去を表したり、過去形が未来を表したりすることもあるからだ。

リヴァロルはSVO(「主語—動詞—目的語」)という語順が自然な思考を反映していると言い、それを根拠にしてフランス語の論理性を主張した。しかし世界の言語を見ると、統計上最も多いのは、日本語と同じSOV言語(「主語—目的語—動詞」を基本とする言語)である。したがっ

て、英語やフランス語のような SVO が最も自然な語順だとは言えない。

語彙についてみると、フランス語は英語や日本語に比べてその数が少ない。そのため一つのことを数語の組み合わせで表すことがよくある。例えば *salle à manger* (食堂←食べるための部屋。英語 *dining (room)*)、*sac à main* (ハンドバッグ←手に持つかばん。英語 *handbag*) など。この傾向を挙げてフランス語は分析的な言語だという人もあるが、一方で1語がいくつかの意味を持ついわゆる多義語も多い。これは明晰とはいえない。

それどころか、フランス語においては事柄をあいまいにぼかそうとする表現の例は枚挙に暇がなく(石野 1997)、実はフランス人はあいまいな表現が好きなのではないかと思うほどである。たとえば *un peu*「ちょっと、少し」のような微妙な数量や程度の表現はよく使われる。

(28) *J'aime un peu.* (ちょっと好き)

(28)で、*un peu* (ちょっと) は必ずしも少量を表すとは限らず、全体の語調の緩和にも役立っている。この「少量(の)」を表す *un peu (de)* には、同様の意味を持つヴァリエーションがいくつ也存在する。

(faire) <i>un bout de promenade</i>	ちょっと散歩 (をする)
(faire) <i>un brin de causerie</i>	ちょっとおしゃべり (をする)
<i>un doigt de vin</i>	ごく少量の (←指ほどの) ワイン
<i>une pincée de sel</i>	一つまみの塩
<i>une poignée d'opposants</i>	ひと握りの反対者
<i>un quarteron de partisans</i>	ひと握りのゲリラ
<i>un rien d'admiration</i>	いくらかの賞賛の気持ち
<i>un soupçon de lait</i>	ほんのわずかのミルク
<i>une touche d'intelligence</i>	いくらかの知性
<i>un zeste de bêtise</i>	いくらかの愚かさ

— 石野(1998), p.9

あいまい表現としては、20 世紀に入って多様されるようになった主語代名詞に *on* がある。これは状況に応じて漠然と主語を表す。

(29) *On a bien mangé.* (私[私たち、あなた(がた)、みんな]は食事を堪能した。)

(29)では、*on* の示す主体はいくつかの解釈が可能である。とりたてて言及する必要のない主語を表すときに用いるもので、主語を明示したくないが省略できないという制約を満たすためだけに用いられるとも言える、変わった代名詞である。

また彼らはしばしば返事として「ウィ・エ・ノン」(「はい」でもあり「いいえ」でもある)と答える。

(30) *Oui et non.*

ただ相対的に見ると、日常の言語生活において、日本人は断定することをできるだけ避け、自分の意見などをなるべくぼかして表現しようとする傾向があるのに対し(たとえば「私(僕)、フランス語とか好きだし…」とか「ええ、まあ」という返事など)、フランス人はできるだけ論理的に(あるいは理屈っぽく)表現しようとする傾向があると言える。

たとえば「ウィ・エ・ノン」と言った後、彼らは「どうしてウィかというのと…、どうしてノンかというのと…」というように、それぞれの理由を説明する。

こうしてみると、理由を説明する言い方や、論理的な表現が多いのはフランス語の特徴かもしれない。その意味で、彼らは確かに議論好きである。フランス人が食事をしながら、延々と議論に花を咲かせるのはよく知られている。

結局、一つの言語は論理的でも非論理的でもない。それぞれの言語の論理(発想法)があるだけだ。日本語には日本語の論理があり、フランス語にはフランス語の論理がある。

言葉が論理的か明晰かは、使う人が論理的か明晰かという問題であり、ある程度は文化の反映である。したがって、フランス語そのものが明晰というわけではない。しいて言えば、フランス人の議論好きがフランス語に反映しているということである。

8. まとめ — フランス語は特殊か

読まない語末子音字やリエゾン現象、否定表現 *ne...pas*、前置された複数の代名詞の語順制約などを個々の現象として見ると、フランス語は特殊な言語としての面が強調されるかもしれない。

しかしそのほとんどは、語末音の弱化、消滅という原因から生じた歴史的変化の結果である。それを知れば、必ずしも特殊な現象ではなく、一連の因果関係の帰結であることが分る。

また代名詞の語順、代名動詞の多用、非人称表現・受動表現の存在などは、言語一般に見られる情報構造の原理の反映であることを見た。

同時に、情報構造は、話し手を特別な位置におく言語の性質とも関係があることに言及した。言葉は話し手、動作主体、人間、生物を重視し、第三者、非動作主、非生物を遠いものとする傾向がある。そういう言語一般の特徴から、フランス語も外れてはいない。

明晰、論理的といわれるフランス語にも、さまざまなあいまい表現が存在し、それが好んで用いられている。このように言語は、常に厳密に、論理的に使うだけでは機能せず、時にはあいまいに表現することが必要になる。あいまい表現だからこそ言える場合もある。この点でもフランス語は例外ではない。

以上のように、フランス語の特性を追及していくと、そこに言語一般の性質が見えてくる。

【文献】

- 石野好一『フランス語の意味とニュアンス』（第三書房，1997年）
- 石野好一『パターンで覚えるフランス基本熟語』（白水社，1998年）
- 石野好一『フランス語を知る，ことばを考える』（朝日出版社，2007年）
- 片野順子『世界の言葉で『アイ・ラブ・ユー』』（日本放送出版協会，2003年）
- 金谷武洋『日本語文法の謎を解くー「ある」日本語と「する」英語』（講談社，2003年）
- 金田一春彦『ことばの歳時記』（新潮社，1966年／1973年）
- 久野暲・高見健一『謎解きの英文法 文の意味』（くろしお出版，2005年）
- クリスタル，D.『言語学百科事典』（大修館書店，1992年）
- 角田太作『世界の言語と日本語ー言語類型論からみた日本語』（くろしお出版，1991年）
- 東京都立大仏文研究室編『フランスを知るー新〈フランス学〉入門』（法政大学出版局，2003年）
- 東郷雄二「新しい語学のすすめーフランス語」『言語』2008年4月（大修館書店）pp. 66-69
- バウワー，L.，P.トラッドギル『言語学的にいえば…ーことばにまつわる「常識」をくつがえすー』（研究社，2003年）
- 春木仁孝「フランス語の発想・日本語の発想」『ふらんす』（白水社，2001～2002年）
- Breton, R. *Atlas des langues du monde. Une pluralité fragile.* (Paris : Autrement, 2003)
- Tomassone (dir.), *Grands repères culturels pour la langue française.* (Paris : Hachette, 2001)